

# Queer Film Festivals in East Asia: The Metropolis, LGBTQ Activism, and Community Building

(東アジアにおけるクィア映画祭：都市、LGBTQ アクティヴィズム、コミュニティ形成)

秦勤

クィア映画祭は、1960年代から70年代にかけて興隆したゲイ解放運動及び女性解放運動の影響の下、アメリカのサンフランシスコ市で生まれた映画祭である。アジアでは1980年代に入ってからクィア映画祭が登場した。1989年に誕生した香港同志映画祭はアジアで最大の規模であり、一番長い歴史を持っているクィア映画祭だと言える。1992年に始まった日本の東京国際レズビアン&ゲイ映画祭もまた、香港同志映画祭と並びアジア最大規模を誇っている。2000年以降、クィア映画祭は多くの地域で開催されるようになってきたが、それにつれ、異なる映画祭の間で上映作品をめぐる交渉や組織者たちの連繋が発生してきた。中国の北京クィア映画祭（2001年-）と日本の関西クィア映画祭（2005年-）はその代表である。本博論は中国語圏と日本におけるクィア映画祭に注目し、映画祭の都市背景、クィア・アクティヴィズム及びLGBTQコミュニティ形成を考慮に入れながら、そこで生成されるセクシュアリティの多様性について考察する。

グローバリゼーションとクィア・アクティヴィズムとの関係は、「欧米」と「欧米以外」というように二項対立的に語られることが多かった。デニス・アルトマンは、英語圏以外のジェンダー・ポリティックスや新しい性的アイデンティティがグローバル化のもたらす大きな変化と緊密に結びついていると論じている。こうした中で、アジア既存の文化や習慣、さらには各地域の生活様式の実践への評価も現れてきた。本博論で考えたい第一の問いは、「クィア・グローバリゼーション」の文脈の中で、東アジアにおけるクィア映画祭は如何に位置づけられるのか、という点である。その目的は「クィア・グローバリゼーション」の言説分析と再考である。第二の問いはグローバル化による影響を受けている東アジアで、既存文化や習慣、各地域の生活様式の実践がクィア映画祭を通して、セクシュアリティの多様化をどのように生み出しているのか、という点である。こうしたローカルな視点から見たクィア映画祭の研究はほとんどない。第三の問いはクィア映画祭と都市空間

がどのように結びつくのか、という点である。取り上げる映画祭は香港同志映画祭（1989 -）、東京レズビアン&ゲイ映画祭（1992、1993）、東京国際レズビアン&ゲイ映画祭（1992 -）、北京クィア映画祭（2001 -）の四つである。

本研究では、クィア映画祭とクィア表象、クィア映画祭と組織者間の相互作用を通して、東アジアにおけるクィア映画祭には多様性、偶然性、微弱なアクティヴィズムという三つの特徴があると主張する。主張を裏付けるべく、主に三つのアプローチを採用する。第一は、フィールドワークを行い、一次資料を分析することである。一次資料は作品の上映状況、映画祭の組織者へのインタビュー、映画祭のポスター／チラシ、雑誌やテレビの放送を含む。第二のアプローチは、映画祭の空間の探究である。この空間には「現実の空間」と「抽象の空間」という二重の意味がある。「現実の空間」とは上映場所及び映画祭の地域である。この空間に対する評価は、「その都市の大切さ」や「その会場の意義」という観点からなされる。また、「抽象の空間」は他者の生／生命への配慮・関心によって形成・維持される空間を指す。一般的に、映画祭を行う一つの動機は、クィア映画を上映することで性とそれに関わるライフスタイルの多様性を多くの人に実感させることにある。本論文では、「クィア・スケープ」、「クィア・ゲッター」、「対抗的公共圏」、「ヘテロトピア」といった理論を応用し、映画祭の変遷と映画祭の間の交渉の経緯を明らかにする。このように、上述した二重空間の分析を通して、クィア映画の反体制・反権力性、組織のサポート（例えば政府の文化政策や個人的な資金のサポート）などに関する問題を探求する。第三のアプローチは、映画祭同士の間にも人（主に映画の組織者また観客）、映画作品の視覚表象と音声、また他のメディア（例えば雑誌やソーシャル・メディア）がどのように結びついているのかを明らかにすることである。